

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗現代宗教研究所所長  
三原正資さん

第46回

中学生のころ、「雨ニモマケズ」を読んだのが宮沢賢治との初めての出会い。高校生になり、「銀河鉄道の夜」で再び賢治の作品に触れます。「銀河鉄道の夜」は死者がある世を旅する物語。中高生の多感な時期に死について真剣に考え、苦しんでいた私は、その本で初めて「人間は死んでも魂は残るのだ」という思想に出会います。死への苦しみ・恐怖から解放された瞬間でした。

賢治は18歳のとき法華経に出会い、熱心に信仰するようになり、その信仰心は作品にも色濃く

残っています。「銀河鉄道の夜」や「注文の多い料理店」は仏教・法華経の教えを人々に伝えるために書かれたもので、単なる童話ではないのです。隠された比喩に注目して読むと法華経の思想が表れてきます。賢治のメッセージは、現代の私たちが「死とは何だろうか」と考えるヒントにもなるのです。

### 「雨ニモマケズ」の詩は私たちの生きる支えになる

「雨ニモマケズ」には最後に「サムサノナツハオロオロアルキ ミンナニデクノポートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と記されています。ある程度年を重ねたときに私たちが賢治に共感するのは、この部分ではないでしょうか。「人間というのはこのぐらいいものだろう」という、諦めではなく開き直りの気持ち。それを知ったうえでどう生きていくのが大事であると、賢治は私たちに教えてくれているのです。

賢治は、農民のために私財を投げ打って「羅須地人協会」を設立し、農業指導に奔走した人物ですが、一方で音楽が大好きなモダンな人でもありました。当時はかなりの貴重品だった蓄音機を所有し、ベートーヴェンなどのレコードを地元の人たちに聴かせていたといえます。当然、周囲に受け入れら



上ノ岩手県花巻市にある「羅須地人協会」の建物と宮沢賢治の銅像。賢治はこの建物で農業技術や芸術を教えた。下ノ入口には「白煙ニ居リマス」と墨で書かれている。



れることはなく、まさに「デクノポー」呼ばわり。それでも賢治は意に介さず、理想の世界を求めます。2011年3月11日の東日本大震災以降、賢治が注目されている理由のひとつは、デクノポーと呼ばれても自分の理想を信じて生きていくという彼の強い信念が、大きな問題に直面した私たちにどうして生きる支えになるからではないかとも思うのです。

### 賢治の童話はやさしい気持ちを呼び起こしてくれます

今の日本はがんばりすぎだと感じます。自分の理想はあっても、なかなか実現できない。人生の厳しさばかりを感じて心が疲弊していく……。そんなときはぜひ、賢治の童話を読んでほしいと思います。童話は私たちが普段忘れかけている心のやさしさを呼び起こしてくれます。そして同時に真の強さも教えてくれるのです。賢治のやさしさと強さを心に刻み、人生を豊かに歩いていきましょう。

## 宮沢賢治の童話から やさしさと強さを学んで

みはら・しょうじ 1948年生まれ、広島県出身。1971年に立正大学仏教学部卒業。1978年、広島県福山市にある妙長寺の住職となる。その後、日蓮宗護法伝道部編・日蓮宗新聞社刊『日蓮聖人御遺文習学シリーズ』などの企画・編集・執筆に携わる。2010年より日蓮宗現代宗教研究所長に。近著に『宮沢賢治の宇宙—3.11を超えて—』(さだま新書)など。